

県と市町の地域づくり支援会議 第1回伊勢ブロック会議

1. 開催日時：平成19年6月9日（土）
10:00～12:00
2. 開催場所：ウェルサンピア伊勢「かたらい」
3. 出席者：伊勢市長、鳥羽市長、志摩市長、
玉城町長、度会町長、大紀町長、南伊勢町長
知事ほか



（司会）

定刻となりましたので、ただ今から「平成19年度 県と市町の地域づくり支援会議 第1回ブロック会議」を開催いたします。

本日は、市議会や町議会開会中、あるいは、開会を控えてお忙しいところをご出席いただきましてありがとうございます。

今日、進行をさせていただきます伊勢県民センター所長の辰己でございます。不慣れでございますが、どうぞよろしく申し上げます。

本日の会議は、お手元の事項書のとおり進めさせていただきたいと考えておりますが、その前に、この会議につきまして若干枠組等の説明させていただきたいと思っております。

県と市町の連携につきましては、既に膝づめミーティング、あるいは県と市町の新しい関係づくり協議会等を実施しているところでございますが、本日の県と市町の地域づくり支援会議は、市町の皆様が取り組まれている地域づくりにつきまして、県が市町の地域づくり支援、あるいは県土づくりと有効に作用し、効果的なものを実施されていくことを目的として開催するものでございます。

今後、地域づくりにつきましては、新しい仕組として、県は支援という立場から、県民センターが地域づくりの県の総合窓口となって、各事務所の取組を横断的に調整できるよう役割を果たそうと考えているところでございます。

具体的にはお手元の資料の事項書、会議の名簿、その次にホッチキスの左側留めで、「県と市町の地域づくり支援会議設置要綱」がございまして、これをめくっていただきまして、3ページ横長でございまして、これをご覧いただきたいと思っております。これはポンチ絵で県と市町の地域づくり支援会議の仕組を示しているものでございまして、右の方の県民センターの所長と市町長の皆様と、本日のようなブロック会議を開催するとともに、担当レベルにおきましても、推進会議や課題会議などを開催いたしまして、これを県民センターが核となって、県と市町の連携を強化したいと考えているところでございます。こうした取組によりまして、各分野の施策を横断的に調整しながら、地域づくり支援を進めていこうというものでございます。

それから、地域づくり支援会議で検討された事項につきましては、特に総合的な調整が必要な事項につきましては、この図の約半分左側の所でございますが、県民センターの所長が政策部理事と協議を行うこととしておりまして、本庁の方では地域づくり調整関係部局長会議、まだ仮称でございまして、これを設置して、それにより対応していくというふうになっているところでございます。

以上、これが粹組みでございますが、今日は第1回目ということで、まず知事から地域づくりなどに対する県の考え方を申し上げ、また地域づくりに関連して東京農工大学客員教授の福井先生に今日来ていただいておりますが、「地域の資源を活かした協働による地域づくり」をテーマに講話を行っていただくことになっております。その後、先生の講話等を参考にいただきながら、出席の市長さん、町長さんの方からそれぞれ地域づくりの取組や思いなどにつきましてご発言をいただきまして、今後の地域づくりのあり方などについて意見交換をお願いしたいと存じます。

会議は、事項書に従いまして進めさせていただきませんが、会議終了が恐縮でございますが12時となっておりますので、会の進行につきましては、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

それでは、事項書の1番でございますが、野呂知事からご挨拶を申し上げます。

(知事)

どうもおはようございます。まず、大変平素から県政にご理解、ご支援ありがとうございます。最大のパートナーということで、いつも市町の皆様に一緒にさせていただこうということでやってまいりました。今日は、今センター長が申しあげましたような形で、「県と市町の地域づくり支援会議」というのを開かせていただこうと、そういうことになったところです。趣旨につきましては、先ほどのことではありますが、それに関連いたしまして、少し申し述べさせていただきたいと思っております。

それで、実は昨日津の方で近畿ブロックの知事会がございました。ここでも一番のテーマは、やはり地方分権の推進にかかるところであったわけでございます。実は、昨日は地方分権改革推進委員会事務局長の宮脇先生という北海道大学の先生にお出でいただいて、お話を伺ったところであります。かなりしっかり議論をさせていただいておると思っております。思い切った考えを打ち出させていただきたいと思っておりますが、しかし、同時にそれがどこまで実行性が伴っていくのか。そういう点ではしっかり見守っていかねばなりません。少なくとも第二期の地方分権、これはしっかりと進めていく必要があります。道州制の議論はその上でその次の議論になっていくのではないかと、こういうふうには三重県の方では考えております。地方においても大変な時期でありますので、いろいろな機会に私どもも申し上げていきたいと思っておりますし、また、6団体といったような場もございますので、そういう点では市町の皆様とも論議しながら取組をさせていただきたいと思っております。

さて、6月議会、県議会の方がいよいよ始まりました。この中で第二次戦略計画についてもお示しをいたしてきておるところでございます。そこで「県土づくり」や「地域づくり」についてどういう考え方で県が取り組んでいるのかというのを、この際少し申し上げておきたいと思っております。

市町村合併が進展をいたしました。市町は従来に比べて非常に広域的なエリアを担うようになってまいっております。それから、もちろん世界的に地域間競争も激しくなっておりますし、道州制の議論、こういったことも出てきて、経済界では非常に広域的なブロック化を意識したものも顕著になっております。

そこで、第二次戦略計画の最終案では、こういう内外状況の変化を受けまして、県と市町の役割分担を踏まえながら、中部圏、近畿圏など県を越えました視点も含めまして、より広域的な視点から県としての役割を果たし、また市町におきましてもブロック化の動き

に対応できるような、そういう高い行財政能力が今求められておる。こういう認識を示しております。

こうしたことから、戦略計画の中では、実は県域全体を対象にしました「県土づくり」というのと、それよりも小さいエリアを対象とした「地域づくり」の2つの方向に分けて考え、2つの方向で取り組んでいくということにいたしております。そして、「県土づくり」の行政の主体は県であるということ。それから、「地域づくり」の行政の主体は市町が担うということといたしまして、その上で両者の連携をより一層強めていくということが大事でございます。

さらに、「県土づくり」につきましては、3つの視点で進めていこうということにしております。1つは、ブロック化の動きに的確に対応していくということ。2つ目には、活力を持った魅力的な地域というものを県土全体に広げていくんだという視点での取組。3つ目には、こうした取組を促進していく基盤整備をやる。今申し上げたブロック化等の動きに対応する広域的な対応、それから県土全体に広げるという考え方、それから基盤整備。この3つの視点で「県土づくり」を進めてまいりたいと思っております。

それから、その上で実は県北部を中心として蓄積された技術力をもとに新産業に挑戦をしていくという、そういうイメージの「産業集積活用ゾーン」というのと、県南部を中心といたしました恵まれた自然・文化を持っておる。それを活かした取組をやっていこうという「自然・文化活用ゾーン」。この2つの振興方向というものをもって「県土づくり」を展開してまいりたいと考えています。

この伊勢ブロックにおいては、もちろん伊勢神宮がございますし、鳥羽・志摩といった素晴らしい豊かな歴史文化資源を有している所でございます。そして、平成25年の御遷宮という大きなチャンスもございます。したがって、観光振興のための情報発信や集客戦略を推進いたしますとともに、宮川流域ルネッサンス事業であるとか、過疎・離島の振興など、地域の特性をどう活かしていくのか。そういった取組。あるいは、県南部における産業誘致のあり方。こういったことも含めて地域の活性化を図っていきたいと思っております。

それから、この第二次戦略は、大元に地域主権の社会の実現を目指していくということがございます。そこで、旧来から申し上げておりますけれども、県民の皆様はじめ多様な主体で「公」を担って支えていくんだという「新しい時代の公」の考え方を県の仕事の進め方のベースとしていくということ。これが1つの大きな柱になります。それから、もう1つは、経済的な価値だけではなくて、文化的な価値にも着目しながら、経済と文化のバランスのとれた政策へと転換しようということで、「文化力」の考え方を政策のベースといたしまして、政策全体を見直してきているところでございます。この「新しい時代の公」と「文化力」の2つの考え方を中心にしまして、「質の行政改革」というものにしっかり取り組んで、県政としては新しいステージを着実に進めてまいりたいと思っております。

こういう認識のもとで、「しあわせ創造県」の実現に取り組んでいきたいということですが、実は三重県ではお伊勢参りや熊野詣といった出会いと交流の中で育まれてきた多様な豊かな文化資源というものがございます。そこで、「こころのふるさと三重」づくりという取組を今回しっかり進めていこうということにしております。それは、地域に住

む人が自らの地域への誇りと愛着を再認識し、訪れる人が心の拠り所を見つけて、心の豊かさを実感できる地域をつくっていきましょう。そのために、観光振興とイベントを一体的に展開して、集客交流や地域経済の活性化につなげていきましょうというものでございます。

今、実はこのイベントにつきましては、その基本構想を取りまとめる委員会を開催いたしております。さまざまな分野の委員の方々に検討いただいております。年内には最終案をとりまとめていただきますので、それをまずベースに、今度は皆さん、企業やさまざまな主体、こういった方にも参画していただいた上で、具体的にそれを詰めていく。どういうふうに推進をしていくか。こういったことをしっかりと展開に結び付けられるように取り組んでいきたいと思っております。そして、イベントを通して地域で取り組む地域づくりと効果的に結びつきますように、ぜひ今後の展開については市長、町長の皆様にご協力をいただきますようお願いを申し上げます。

さて、いろいろ申し上げましたけれども、この地域づくり支援会議におきましては、これからの地域分権の進展を見据えました地域づくりの方向性について、県民センターを軸として、市長、町長の皆様をはじめ、さまざまな分野の県と市町の職員が一体協力して、地域の問題について調査・研究を行いながら、自立的で持続的な地域づくりの進展につなげていきたいと思っております。

今日は、そのスタートということで、私も出させていただいたところでございます。どうぞ今後成果を生み出せるように、皆さんの取組をお願い申し上げたいと思います。そして、今日、福井先生にお出でいただいて、多分いろいろな大変興味深いお話をさせていただけるのではないかとと思っております。福井先生、どうもありがとうございました。よろしくお願ひいたします。

(司会)

それでは、2番の福井先生のお話の方に移りたいと思います。先生のプロフィールというのが事項書の下に書いてございますが、ここにございますように伊勢市のご出身でございます。先ほど知事の話でも出ました「こころのふるさと三重」づくりの基本構想検討委員会というのを県の方でやらせていただいておりますが、そこで福井先生にはその委員として、地域づくりのご専門の立場からいろいろご意見をいただいております。そういうことも付け加えまして、それでは先生の方から、「地域の資源を活かした協働による地域づくり」ということでご講演の方よろしくお願ひいたします。

(福井講師)

おはようございます。ご紹介いただきました福井でございます。はじめまして。ご紹介ありましたように、伊勢で育ち、長く伊勢を離れてはいるのですが、最近非常にたくさん呼んでいただいて、毎週のように三重県に伺っています。本当に地元でこういうお話をさせていただくのは、非常に私は光栄だと思っております。ありがとうございます。

それでは、だいたい35分ほど頂戴しまして、スライドを交えてお話をさせていただこうと思いますが、最初にスライドの前に、お手元にお配りさせていただいたペーパーで左留めホッチキスで、下の方に「持続可能性を担保した地域資源の活用のあり方」という資料がございます。それをちょっと見ていただけますでしょうか。

今、知事の方からも、地方分権のお話があったと思うのですが、私は常々こういう地域づくりのあり方というのは、やはり基本的には補完性の原理と言うのでしょうか、まず集

落でできることは集落でやると。それでできないことは、市町が助けると。それでもできないことは県が助けると。このような形。当然それでもできないことは国がやると。そういうことが基本になろうかと思いますが、突き詰めて言えば、集落であるとか家族が長く持続可能な暮らしができることをやっていく。これがやっぱり基本になろうかと思いますが。そういう意味でお話をさせていただきます。

それで、この紙ですが、私、今年間 150 日から 200 日くらい家を空けて北海道から九州まで現場のお手伝い等させていただいているのですが、地域資源を活かしたというのは、もう本当に耳にたこができるように、今皆さん聞いていらっしゃると思いますが、どうも国の官僚のレベルまで上がると、非常に浅いなというのが、実は私印象として思っています。それで、私なりに地域資源を活かすということを、スライドの前に基本的な話をさせていただきたい。これはあくまでも私の私見でございますが、基本は 4 つあるんじゃないかなと思います。

まず、1 番目。省みられることのなくなった資源であるとか、あるいは未利用資源に新たな価値を付与するというのが、今求められていると。それは、要は価値がなくなったものですから、それに新たな文脈を見つけるという意味だと、私は感じています。その文脈の価値の意味というのは、まず一番大きいのは、経済的価値を見つけること。それから、最近新エネルギー等、CO₂の問題でいろいろやかましくなっておりますが、そのエネルギーの価値としても、例えば小水力のようなあまり使われてないようなものに、改めて価値を見出してみるといふことも必要かと思えます。それから、皆さんあまり気が付かないのですが、生活を潤していく美的な価値というのは非常に重要なのではないかと。知事も文化力という言葉をおっしゃっていますが、そういう意味でも非常に重要だと、私は感じています。それから、最後に人ということの部分で教育価値。これも非常に重要な部分ではないかと思えます。この中身については、スライドでまたご説明いたしますが、さまざまな事例が全国にあるということです。

それから、2 目。基本の 2 目は、一番下の行ですが、省みられることのない風土にある資源を利活用していく生活システムそのもの。これをもう一度光を当てていく必要がある。ものすごく単純に具体的に言いますと、自給であるとか助け合う心というのは、非常に今疎んじられていて、貨幣経済があまりにも強調されて、本当は自給と互助があって、その上に貨幣経済があると。そういうことをもう一回見直す必要があるんじゃないかと思えます。それから、手入れ文化を評価。手入れ文化というのは、養老孟司先生がしつこくおっしゃっているのですが、日本は古来自然との共存という部分で、手を入れながら脈々と文化をつくってきた。そういうことにもう一回光を当て直す必要がある。それから、3 番目は、これはなかなか宗教の関係で難しいのですが、地域固有の信仰というものをもう一回再評価していく必要があるのではないかと、私は感じています。これは、当地の伊勢神宮というのが、江戸時代まではそういうシステムの頂点にあったということ、改めて光を当て直す必要があるんじゃないかなということにつながると思います。そこまでが 2 目の所。

3 番目は、次のページの途中に書いてありますが、そういうことが活かされて初めて生まれる「風景」。持続可能な地域資源の利活用がもたらす「風景」の美しさに価値を見いだしていく。これは結果だと思えます。明治時代、英国人イザベラバードという方が、日本

の農山漁村を「桃源郷」と称されました。これはさまざまな日本の暮らしの総体が美しいということです。それをぜひできれば三重県で新しい形として実現していただきたいなと思います。実際にそういうことをやられている取組が、今日もご説明いたしますが、バリ島。ここでは、棚田の景観とか人の営みそのものが観光価値ということで、一泊 15 万もするような「アマンガリ」という所が、それを価値の中心に据えて、世界中から人を呼んでいらっしやいます。なおかつ動物園のように扱うのではなくて、地域のコミュニティの 1 員として、そのホテルが存在している。こういうケースがございます。日本でもそれに近いような取組が少しずつ出ています。

最後に、こういう資源、資源と言いますと、どうも物という視点が強くなるのですが、やはり、地域資源の利活用の中心には、人です。人との関係性の中で、初めて有機的に再構築されていくのだというふうに私は思います。最初に国の官僚がおっしゃることに違和感を持ったのはそこです。貨幣経済のシステム内に地域資源を単純に取り込もうとするんですね。そうじゃないんです。生活する人が中心にいるシステムを再構築していく。これが非常に重要だと思います。すなわち言い方を変えますと、安易な資源利用は、外部資本による地域の単なる消費を招く結果になります。これに気を付けて、ぜひ持続可能な地域資源利活用システムをつくること。それは経済・環境・社会、それぞれの持続可能性を基本としてやってくシステムです。

これは、先日、松阪市の宇気郷むらに伺って、西井さんという方が中心になってやっていらっしやるのですが、その話をしましたら、「そうなんだよ。都会から来る人は勝手なことと言って、いつかなくなっちゃうんだ。ここで生きているという人が、この覚悟が絶対必要なんだ。その上でいろいろなものを利活用する。そういうことが必要だ。」と彼はおっしゃいました。本当にそのとおりだと私思います。これ同じことを湯布院の中谷健太郎さんもおっしゃっています。それが基本になるところです。そのようなお話を、スライドを交えてお話をしたいと思います。では、ちょっと暗くしてください。

なぜこんな地域資源を活かすようにしなくちゃいけなくなったか。これ飛ばしながら行きますが、グローバル危機すごろくというのを農工大の先生が作りしました。堀尾教授という者がつくったのですが、「近代化」というのがスタートで、今地球環境の大変動で大きな問題になっていると。それから、エネルギーの危機になってきた。食料との取り合い、最近話題になっていますね。とうもろこしとエタノールですね。どんどん危機が増幅している。地域の資源を使わない形でお金だけで石油を輸入してという形になったために、地域経営力が非常に脆弱になっていると。このようなことで文化伝統危機、風土とのつながりがなくなっている。これが実は全体の構造になっているということです。

この背景にあるのは、ちょっと前までは「そんな問題ないんじゃないか」と言われていたのですが、石油がもう本当にピークを迎えている。あと 500 年もつと言うけれど、たった 500 年ですよ。で、温暖化気候変動も、この左下の表にありますように、ここ 1000 年の間に圧倒的に CO₂ 濃度が上がって温度が高まっていることは明らかです。で、ここですね。こういうことは、人間の活動でこうなってきたということが明らかです。こういう有様を変えていかなければいけないというのが大きな背景にある。

上の表は、石油公団が発表している資料で、あと 280 年石油はあるんだと言うのですが、質の高い石油というのはあと 60 年しかないということです。エネルギー効率のよいまとも

な原油はあと 60 年しかないということが、非常に大きなポイントです。で、ご承知のようにオイルの値段も上がっている。これも大きな背景になっています。エネルギーというのは、エネルギーを取り出すエネルギーがまた必要なんです。この数字が 1 以下になると赤字になるのですが、実はエタノールは 1.3 です。ものすごく効率が悪いです。原油だと 100 超えているケースもあるのですが、そういう非常に効率のいいエネルギーというのは、実はあまりないということが、今現実になっています。

資源を見たときに、これいつも使う表なんです。この 50 年、60 年で、原子力、天然ガス、石油の利用が右肩上がりに増えました。それに伴って、薪炭林の利用が減った。薪炭林の利用が減ったことによって、まったく並行してマツタケの生産量が激減しています。要は、人間の手が入らない雑木林にマツタケが出なくなったということですね。ですから、資源の利用というのは、人との営みの中でつくられていくものだとすることを改めて確認する表だと思います。

例えば、山菜ですが、先日、日経新聞 5 月 15 日にこんなことが書いてありました。本来、新エネルギー、バイオ燃料等を使うというのは、本当は余った燃料を使う話だったんだけど、今は効率優先で考えてエネルギーをつくるから、とうもろこしが食料との取り合いになってしまった。こういうことは問題じゃないかと書いてあります。で、赤で書いた部分。昔から日本では、日本伝統の食料と燃料のコラボレーションがあって、山菜も豊かにあったと。こういう話です。

耳にたこのような話ですが、世界の現実の一部として、石油以外の話も含めると、有名なビルゲイツさんの年収は、アメリカ国民の下層階級の 1 億人に相当するそうですね。要は、過度の格差が発生しています。それから、世界の総生産高は 50 兆ドルだそうです。それに対して流通する貨幣が今 500 兆ぐらいです。10 倍です。実態経済から金融経済へという言い方をしています。こういうことがどんどん進むと、地方の切捨てにつながっていく。これが現実です。ご存知のように、日本の総借金は今 1,000 兆円を超えたそうです。財政も非常に厳しい。その中で、いわゆる燃料も石油がピークを打って、サウジアラビア最大の原油が今危機に瀕している。原子力も 100 年で枯渇するそうです。温暖化も事実であるということが、今年発表されております。これが現実です。

私は、こういう危機に瀕してどうやっていくかということを、常に皆さんと考えながらやらせていただいているのですが、こういう資源を、みんなの前にある資源を活かした価値創造をみんなで作っていくしかないかと、改めて思っています。現場をよく見て、地域でいろいろな人たちと話し合いながらやっていくということを基本に置いております。現場で考えることが基本です。そういう話の中で、いろいろな事例をあと 15 分、20 分、話をさせていただきます。

とは言え、農山漁村・中心市街地の皆さんのお話を伺うと、単純に言いますとこんな話ですね。行政は、「耕作放棄地が広がって問題だ、問題だ」と言いますが、おじいちゃん、おばあちゃんは米や野菜を自給しながら年金で何とか食っている。問題は獣害なんだよと。何とか子どもたちが帰ってきてくれるといいんだけどなと漠然と思っているらしいです。すなわち、集落崩壊の危機は漠然とは感じているんですけど、地域として共有されておりません。これが現実です。これは実は中心市街地も同じです。行政は、「スラム化しちゃって問題だ、問題だ」と言うけれど、何とか家賃も払わず自分の家だから、月 10

万ぐらい上がりがあれば、年金もあるので何とか食っていける。問題は、子どもたちが帰ってきてくれないかなというふうなイメージを皆さん持っています。これは、同様に地域が崩壊の危機、スラム化の危機を共有化していないということです。非常に問題です。こんな状態では誰も夢を持ってないので、若い子どもたちは出ていくだけです。

これは丸山千枚田なんですが、美しい営みの風景をどうしていくか。今の話を改めてまとめると、行政の視線は、里山にも耕作放棄地が増えて、少子高齢化の問題だと言います。でも、地域の農家の思いは、これまで代々ここで頑張ってきたんだ。何とかなっているんだ。でも、獣害がひどい。生活が厳しい。そこを支援してほしいという言葉が出てきます。そこに最近で団塊の世代の大量退職等でイターンで入って来られた方はどういう視点で来るか。「こんな美しい里山を守ってほしい」と言うんですね。よそ者の視点でいきます。何とか利用しようと強要するんですね。こういう3者のずれが今問題なんです。

こういうことをみんなで語る場所が必要だと、私は思います。未来を語る場所をつくる。地域も縦割りになっていて、総合的な未来を語る場所がありません。みんなでそれを語って、地域の資源に気付いて、経営と利用に関わる仕組みが今必要なんじゃないかなというふうに、最初に結論的な話をさせていただきました。

これは何を書いているかというと、今の話。もう新しく入ってきた人たちというのは、非常に利己的で都会的な考え方をされるので、村の人たちと齟齬が発生します。で、挫折して帰っちゃう人も結構います。こういう人たちをやっぱりまとめていくコーディネーターとか場であるとか、そういうものも必要だと思います。

これはちょっと飛ばしますね。もう豊かな時代、財源がたっぷりあってやっていける時代は終わりました。それを先ほどの500兆ドルじゃないですが、金融経済にいつている中で、そういう有様というのはおそらく破綻するというのは先が見えていると思いますので、何とか自分たちでやっていける仕組みをつくる必要がある。

公益のこれまでのあり方はどんどん効率化していきました。すなわち、成長・発展という概念ですべてを切ってきたのですが、今、民間委託というような効率化ですとやってきていますが、これではもう先はないような気がします。やはり持続可能性ということを非常に重要視してみんなでやっていく。競争から持続へということ、パラダイムを転換する必要があるのではないかと思います。3つの持続可能性、環境・経済・社会の持続可能性をつくっていく。

これは最近書評でよく出てくるのですが、「人は何故グローバル経済の本質を見誤るのか」という水野さんという金融のプロが書いた本に、1995年に近代化の仕組みがもう崩壊したと。成長手段ないしは目標として捉えること自体が、古い思考あるいは近代化の思考であるというふうに彼は書いています。金融のプロが言っています。最近、話題になっていますので、ぜひお読みいただきたいと思います。

地域の持続を目標とした経営に変えていく必要があると。生きること、生き延びることということが非常に重要である。地域が生き延びていくこと。そこを基本に考えていただきたいと思います。過度な福祉・教育に財源を投入しても、もうこれは生き延びていけないというふうに、私は感じております。集落が消えて、人が生き延びていくことはできないと思います。

このような美しい風景がどんどん消えていきそうになっている。この現実というのは、

一人一人、例えば目の前にクレソンだとか山菜があっても、そういうものはスーパーで買うものという意識が今もう強くなっています。そこから変えないとだめでしょう。やはり新しい今の技術も含めて、地域の自立を目指してみんなで作っていく。こういうことが、私は重要になるんじゃないかなと思っています。

そういう場をつくっていく。みんなで語る場をつくる。三重県ではふるさと学という形で地元学というものを取り入れていただいておりますが、やはりみんなで地域の価値を見つめる場というのをもう一回考え直す必要があると思います。それから、地域の状況を共有化する。さっき言いましたが、危機意識をみんな持っているんだけど、みんなの危機意識になっていない。何とか行政がやってくれるという体質から抜けられません。それを抜け出さなければいけない。そのためには、資源に新たな価値を見つけて、最初に申し上げたような利用をやっていくということです。

では、事例の話をしていきます。例えば、経済的価値を見出した例では、これ非常に有名な事例なので皆さんご存知だと思いますが、徳島県上勝町という所では、葉っぱのビジネスが非常にうまくいって、一番驚いたのは、おじいちゃんやおばあちゃんが元気になったことによって、医療費負担が町で半分になりました。これは非常に大きなポイントですね。厚生年金等の施設をつくるのではなくて、新しいビジネスをつくることによって、医療費が半分になった。これは大きいと思います。そういうことが始まったことによって、さまざまな動きがこの地域では出ています。ある方は、「ゴミの34分類」という日本でもトップレベルの分類が非常に進んでいることを評価されたり、いろんなことが評価されて、優秀な人材が今ここにはたくさん集まってきています。このような葉っぱですね。これは柿の葉っぱですが、このようなものが全国で販売されています。

私、ここの話はどこでもするのですが、高知の旧十和村。ここでは1989年にこういう村の振興計画をつくっているんです。「十和のものさし」という冊子です。成長・発展という概念を、この時代に既に独自のものさしで十和村をつくっていくんだということを考えられました。で、これはびっくりしたのですが、ヨーロッパが一番、アメリカが一番、欧米に追随するというのが日本の戦後の流れだったのですが、89年に既に日本が大切なんだよと。そういうことを1つのキーワードにやってきて、2年ほど前に十和村は内閣総理大臣賞を受賞されました。「おかみさん宣言」という、これ非常におもしろいなと思ったのですが、手作りISOで、自分たちの野菜をデパートで売る仕組みをつくっていらっしゃいます。これを仕組んだデザイナーがいて、高知県の梅原さんという方で、私も一緒に仕事をさせていただいているのですが、有名な馬路村のゆずのデザインなんかもやられた人です。地元学の視点で商品を開発して進めています。

典型的な例を1つお話します。十和村はお茶の産地です。伊勢茶と同じように、非常に優良なお茶をつくっていたのですが、四万十川流域で手摘みのお茶100%なんだけど、100%JAの系統出荷で静岡へ行っていたそうです。要は、静岡茶のブレンドの渋みを出すための原料として使われていた。「そんなことでいいのかい」と。「そんなプライドのないことでいいのか」ということを梅村さんが提唱しまして、最初は5%だけ俺に任せろということで、このようなお茶を開発しました。ペットボトル入りのお茶を開発しました。だけど、四万十川の水で入れた手摘みのお茶。おいしそうですね。これがヒットしまして、今四国中のインターチェンジでこれを買えます。なお、かつ、こういうような手作りのり

サイクルのトートバックをおばあちゃんがつくってきました。これがいいということで、伊勢丹で販売が昨年からはまりました。このような、ほんの単純なことでも大きな産業につながっていく可能性があります。

そこでは、おばあさんたちが栗の産地で、小布施とか日本中に栗を出荷しているんです。これもJAの系統です。これももったいないじゃないかということで、おばあさんたちがつくる栗きんとんを商品化しようということになったのですが、地元の方は反対しました。「こんなの2日しかもたないし、ちょっとしかつくれない」。逆にそれが武器なんです。そういうことを進めて、今、高知県下でしか販売されてないですが、非常にシーズンは取り合いになるくらい売れているそうです。

これ皆さんびっくりされると思うのですが、ひのきの間伐材を何とか利活用したいんだと。林業組合から梅原さんに依頼が来ました。「ひのきの風呂」という焼印を押して、ヒノキチオールをこのひのきの木に含浸させまして、匂いを強くしたんですね。そうすると、お風呂に浮かすとひのきの匂いがブーンとするんです。これ1個200円だったかな、パッケージ。2年間で1億円売りました。ほんのちょっとしたアイデアですね。目の前のことをどう活かすかという視点です。

で、先ほど言いましたおかみさん宣言。こういう直販所から始まったのですが、もうどこにでもあるような小さな直販所が、農家のおかみさんたちが自分たちがつくる自家用野菜をISOを取って高知のデパートと組んで今販売をして、どんどん拡大しています。おかみさんのいいと思うことは、みんなもいいと思う。こういう意味ですね。非常に大きな産業になり始めました。

次の事例。これは山形県朝日町という所で、県の職員が指導してやっています。あえて誘導した先進事例です。みんなで地域の将来をワークショップで語り合っ、地域資源を活かして、要は未来図をつくりました。どういうことかと言うと、もう本当にあるものを全部探してみんなで利用する仕組みなんです、ポイントはこういうことです。中山間の農村地域、それから平地の農村地域、それから町、いわゆる市街地。この3者が協働したんです。それぞれの特徴を活かしてやっていこうと。こういうことをやりました。細かい内容は割愛しますが、それぞれが持っている課題をいろいろな形で一緒にテーブルに着いて考えることによって利活用していくという仕組みを見事につくってうまくいっています。

例えば、中山間地域では棚田の価値。これは先ほど言いました、手を入れた美しい風景ですね。そういったものがある地域の農産物に付加価値を付けて、町で売ってもらう。付加価値のあるものを町で売って交流を行っていく。このようなことをここではおこなっています。ポイントは、まず場をつくりました。それから、危機感を共有して、それぞれがどう行動すればいいかをみんなで語り合う。で、自ら計画をつくって、それを自治体が事務局で支援をして、計画を実施していきました。農家の方って、事務能力が非常に弱いんですね。そういうことをやっていかれました。で、つながりをつくって回していったということです。

ここでは棚田チケットというものを配っています。都会の人に来てもらって、いろいろ手伝ってもらうのですが、500円価値のチケットを渡しています。それで、秋になったら収穫祭をするのですが、1俵12,000円の米に付加価値を付けて30,000円で販売しています。小分けにして売っているのですが、このチケットで買える仕組みです。地域でつくっ

た野菜も買えます。農家には、JAに売ったら12,000円なんですけど、この棚田米を出してもらった方には、実際には12,000円しか支払っていないんだけど、残りの18,000円はその野菜等を出してくれた人に回す仕組みをつくったんですね。結局、農家には30,000円入るような仕組みです。それが非常にうまく回っています。要は、行政がいわゆる仲介者になって、非常にうまくいっているケースです。

先ほど信仰の話をちょっとしたのですが、こういう1000年以上続く桜の木がどこの集落にもあるんです。これは桜を中心としたある大きな信仰のつながりがありまして、それを集落ごとにつなげていって、「さくらの回廊」というものを仕組みました。そうしましたところ、非常に美しい桜が春になると咲く地域でございますので、映画のロケ、スイングガールズという非常にヒットした映画ロケがここで行われて、人が来るようになりました。非常に新しい仕組みです。

それから、地域の眠っていた資源を活用する1つの事例としましては、これも皆さんよくご存知かもしれないですが、NECとアサザ基金というのが霞ヶ浦流域でやっている取組です。これは本当に荒れてしまった、25年ほど使われなかった谷津田が、NECとの協働でこのように、今活用されています。具体的には、社員が参加して季節、季節にやって来るのですが、ただのボランティアではございません。企業にとってはものづくりの研修とか環境の研修になっています。とれたお米、酒米なんですけど、それを地域の酒蔵でお酒にして、NECが買い上げる仕組みにしています。それはものづくりの研修の一環でもあるわけです。NECの方がおっしゃっていたのですが、今、電話1本で設計図さえあればコンピュータはつくれる。部品だけ買えばいい。これではものづくりの心は生まれにくいそうです。だから、不良品が増えている。そういう現場に入ったものづくりの心を研修するという意味でもこういうものを行っているんだと。家族も参加しますので、小学生が「20歳になったら飲みたいから、俺に分けてくれ」と、こういう話も出てくる。非常にいい話です。これは耕作放棄された田んぼだけじゃなくて、近くの畑も耕して、今大豆をつくって、近くの味噌屋さんで味噌をつくって、NECの食堂で利用する。こういう仕組みにもなっています。

実は、NECさんはそれだけではなくて、小学校とも協働でビオトープでの小動物や水性植物を観察するITシステムをつくって、NPOと共同特許を取って世界中でビジネスをしようとしています。要は、お互いが勝てる関係、ウインウインの関係がNPOの企画提案から成り立った形です。

さまざまな協働がこの事業の中では生まれています。NECとNPOだけではありません。本当にたくさんの方々がつながった事業が行われていまして、特にこの中で私が一番おもしろいなと思ったのはこれです。外来魚の駆除に皆さん困っていらっしゃると思いますが、駆除ではなくて利用しようという仕組みです。漁協が外来魚をとります。それを買って、魚粉堆肥にして、NPOがその堆肥を買って農協につなげ、農家が利用する。できた野菜をNPOが作りあげた流通ルートから、カスミという中堅スーパーに卸し、消費者に販売する。その商品は、ブランド化して販売している。非常に今評判よく、売れ残りがほとんどないそうです。このような形で循環する仕組みをつくっています。厄介者も新たな価値になっています。このようなことが生まれた。

それから、教育の話も1つします。これは北海道登別「ふおれすと鉱山」という取組な

んですが、周辺住民5万人の地域で、たった16人になってしまった町。1,600人いた鉱山の町なんですが、廃坑になって16人になった。何とかしないといけないということで10年間話し合い悩んだのですが、なかなか答えが出なかった。でも、あることをきっかけにそれが小学校の廃校跡を利用した拠点施設になりました。みんなで使っています。10年間話し合っただけで、みんなで新しい場をつくって1つの方向性を見つけました。方向性の答えは、「まちの子どもは、まちで育てる」。これを基本にこの施設を利用しようと。そういうことで、今では5年目になったのですが、利用者が改めてつくったNPOが、市から運営受託をしてここを使っています。5万人の町で、年間2万人がこの施設を利用する。90数%地元の方が利活用する体験施設になっています。こういうのは全国でほかにはないと思います。

これ、私今年一番感動した話です。新潟県の高柳という所に農村食堂、小さな食堂があって、あまり上手に行っていない温浴施設の隣にある併設のラーメン屋さん。そこを若い夫婦が借り上げて、ただそのまま使っている。「みんなの」って何でしょうね。「みんなのしるみそラーメン」。これですね。来るお客さんたちが、地域の資源を利用しておいしいものをつくろうよと言ったんです。要は、越後みそという白味噌と高柳のネギは特産なんです。これを使っておいしいものをつくりたい。結局、別にラーメンをつくるつもりじゃなかったんだけど、みそラーメンがうまかった。みんなで開発したから、非常にみんなが集まってみんなでワイワイつくった。こういう子どもが、これが「みんなのしるみそラーメン」です。おいしそうです。みんなでつくったから、みんなで食べるんですね。非常に評判がいい。おいしいです。

この食堂はびっくりするのですが、山の中の小さな食堂で、冷めたラーメンが出てきそうな嫌な店なんだけど、メニューの黒板見てびっくりしました。イベリコ豚のサラミとか、わけのわからない、都会でもなかなか食べられないようなものがいっぱい並んでいる。すごいこだわっています。若い夫婦です。ラー油も自分でつくっていました。ものすごくおいしかった。こういうものが特産品になっていくと思います。これはシェフのお兄さんなんだけど、風呂吹き大根をつくる時に、わざわざ種から探して開発した大根です。おいしかったです。本当においしかったです。こういうものが栽培され、美しい田園風景になっていくと思います。これラーメンです。みんなの活動を応援する店にもなっていました。廃油から作った石鹼だとか、みんなこういう店には集まってくるんですよ。みんなの集まれる場所をつくるというのは非常に重要だと、私は思いました。場をつくって、あるものを知って、新たな価値をつくって、協働していく。

これは北イタリアの風景に似ていると言われている庄内。ここで今イタリア料理屋さんの「アル・ケツァーノ」というのがものすごく人気になっています。イタリアからも見に来たそうです。ただただ単純に地元のものしか使わない。そういう店です。これ今年の春の青コゴミ、赤コゴミを使ってパツァというのをつくった。こんな人たちがやっているレストランが、非常に今話題になっています。

あとちょっとで終わります。やっぱりイタリアなんかでも「チルコロ」という、これ英語でサークルという意味なのですが、こういう場所があるということが非常に重要だと私は思います。日本でもやはりそういう人が気軽に集まれる場所をつくる必要があるんじゃないかと思っています。

我々のグループで資源を利用する、エネルギーに利用する1つの取組の事例ですが、いわゆる使っていない水というものに注目しようということで、水力発電のポテンシャルを考えたら、500m範囲で210kWもつくれるということがわかって、十分自給できる。必要なエネルギーが充分まかなえるということがわかってきました。自給村構想をみんなで作って、これをやったら日本全国の中山間地に展開できれば、CO₂が2,000万tも削減できるので、京都議定書に有効だという話です。

ここに至ったのも、実は地元学というものを提唱した吉本さんに手伝ってもらって、工学部の学生が地元学をやって、エネルギーに使えるものはないかというふうを考えてやりました。こんなことをやりました。こういう絵地図を使ったので、区の会、いわゆる地域の会でもこういうものを見せながら、「やりましょう。やりましょう」で盛り上がりました。連携しながらこういう小水力をつくって、今3段階まで来ています。もうそろそろ実用化に目処がつきそうです。経産省とか国交省さんとか農水省さんも皆さん来られて注目してくださっています。みんなで作っています。それがいろんな形につながっていく。で、コミュニティビジネスになっているというつながりができています。ここは小さいからできるということを逆手に取ってやっています。シューマッハが言う“Small is beautiful”、これを実践しようということをやっています。

要は、こういうふうに非常にひどい竹の状況を見ていただいていますけど、みんなで目の前のものを使わなくなったからです。使えなくなったというか、過度の貨幣経済に依存しすぎているんですね。これをもう一回仕組みの中に取り入れようよという単純な話です。そのためにはやっぱり目の前のものを見つめよう。こういうような形で丁寧に見つめ直して、使えるものを使っていこうよ。昔はいっぱい使っていたんだ。例えば、我々は竹であれば竹炭の粉を、これは町村会のお力を借りて、竹炭の粉でストーブが焚けます。このような形で、新たに使える技術もいろんなものが今ありますので、どんどんそういう形で目の前のものを使う仕組みをつくらうとしています。

最後に、風景の話。先ほど言いましたバリ島。こんな美しい地域です。今でもバリ島では近代化の中で、近代的なものを入れながら、海から山までつながった生活システムもまだあります。そこに人々が行きます。このような形でいっぱい来るんですね。こういうふうに草を運ぶ。これ牛に食べさせるんですけど、こういうことそのものが観光資源になっています。それを「アマングリ」というホテル、それからその周りがあるホテルも同じように、地域と一緒に価値をつくって、運営されて人がいっぱい来るような形。この写真、全部ホテルの中です。このような形で、信仰もその中に入っている。こんなホテルが棚田の中にあるんです。

今、話題になっているふるさと税なんていうのは、バリでは当たり前昔からやっています。こういう風景を、日本の風景をどう活かせばいいのでしょうか。これをみんなで作っていきたいと思います。

最後に、3つの持続可能性。経済的持続可能性、環境的持続可能性、社会的持続可能性。この下の2つ。今特に経済的持続可能性ばかり言われるのですが、経済・社会がなかったら持続可能にはなりません。こういうものをきちんとみんなでバランスよくやっていくことが必要だと私は思います。忘れられた評価されない2つの経済をもう一回見直してください。貨幣経済がすべてではないです。

これは今の状況を書いたものです。先日、多気町の濁川流域に行ってきました。伊勢の台所として醸造所がたくさんあったんですね。美しい風景がまだまだたくさんあります。こういったものを地域の住民の方々に改めて気が付いていただいて、活かす方法をみんなで考えていただきたい。このように思います。

最後に、こういうような話の最終的な着地点というのは、やはり江戸以前にあった日本のシステム。そこに新しい技術を入れて再構築する。その頂点に、かつてはお伊勢さんがあったわけで、おかげ参りというのはおもしろいなと思ったのですが、「参加」という言葉が結局は「お参り」に加わるんですね。生活への感謝があって、お伊勢参りがあった。こういうようなことが、いつかまた復活できればなというふうに、強く私は思っています。

以上、もう5分オーバーしましたが、私のお話は以上です。

(司会)

大変有意義なお話ありがとうございました。

それでは、ただ今から、市長さん、町長さんの皆様に、先生のご意見も参考にさせていただきながら、地域づくりについてのそれぞれの取組をご紹介いただくなり、あるいは今後の地域づくりの方向性やあり方についての思いなどをご発言いただきたいと思います。先ほど急いで説明していただきましたので、質問でも結構でございますが、意見交換に移りたいと思います。

それでは、先生お疲れでございますが、引き続き進行の方をよろしくお願いしたいと思います。

(福井講師)

それでは、地域づくり支援会議ということで、それぞれの市町の首長さんたちが、日頃取り組まれ苦労されていることを、県が今後支援していく。こういうお話でございますので、ぜひこの機会に「こういったことの支援が必要なんだ」というような話、どんなことでも結構でございますので、お話をいただきたいと思います。私からという方いらっしゃったら。もしいらっしゃらないようでしたら、順番にこちらの伊勢の森下さんからお願いしようかなと思いますが、よろしいですか。それで、お1人最低2回ぐらいはご発言いただきたいと思いますので、できましたら3分から5分ぐらいで1回のご発言をまとめていただくとありがたいです。よろしく願いいたします。

(伊勢市長)

ご指名いただきましたので、私の方から。先生、どうもありがとうございました。今、いろいろな事例を聞かせていただきまして、もやもやしていたのがいづらか整理ができてきたなという感じがしています。断片的にはいろいろとあちこちで先生にご紹介いただいたような情報は手に入るので認知している場所が何箇所かあったのですが、改めて整理をしていただくと、また力を貰ったなという感じがしています。

うちの地域もいろいろと活かしていきたいものがたくさんあるわけですが。特に、伊勢神宮という存在が大変大きいということで、それをこれから地域の宝としてどうやって活かしていくかということで、一番大きいのが神宮さんそのものは2千年の歴史というか、純粹にいろんな文化を継承していただいていたと思っているのですが、その周りの私どもの町の姿が、そうしたら2千年の町に相応しい形になっているかどうかと言うと、決してそうではないというふうに思っておりまして、一番気になっていますのは、景観のどこ

るであったりします。そんなところで、地域の皆さんもそれに気が付いて立ち上がっていただいているのですが、何せお金がかかるという部分が非常にありまして、そういったものにうまく資本を集めていくような。行政がお金がないことはだいたい見えて知っていますので、あとは民間のファンドとか、そういったものをうまく集めてくるような、そんな仕掛けがどうしてもいるのかなというのを1つ感じておるところです。

もう1点は、知事の話の中で、県全体の仕組みづくりと、そして地域ごとの仕組みづくりということをおっしゃいました。私どもは、同じ立場に立たせていただくとするならば、市全体のまちづくりとして、地域の自治の仕組みをどうつくるかということが、大変大きな課題になっています。この自治の仕組みが原点だろうと思っていて、地域内に向けたところもありますけど、その自治の仕組みをどうやってつくり上げるか。これは地域ごとに多分違うと思うんです。これがスタンダードというのは、私はないと思っています。そういったところで、どうやって自分たちのことを自ら、自分たちのことを自分たちの手でということを中心に位置づけしていくような自治の仕組みを、今大きなテーマとして始めていますが、大きな課題かなと思っています。そのことを積み上げて、地域ができて、町ができて、そして県ができて、国ができる。こういうストーリーにつながっていくだろうと思いますから、地域の有様といいますか、生活の有様、そんなことについての視点がこれからいろいろと注目されるのかなというようなことを考えています。

また、ぜひアドバイスをいただければありがたいかなと思っています。

(福井講師)

ありがとうございます。地域の自治の仕組みですね。鳥羽市長の木田さん、お願いします。

(鳥羽市長)

ありがとうございます。先ほどの先生のお話を聞かせていただいて、いろいろとを感じる所があったんですが、その中で、エネルギーが枯渇していくという中で、まともな石油はもう60年しかもたないと言われたのですが、そのとおりだと思いますが、実は私、大学生のときに大学の教師から、世界の石油はあと20年しかもたないと言われたんですね。そうすると、自分が40歳を過ぎた頃にもう石油はなくなるんだと、こう思っていたのですが、それから何十年もたったんですけど、まだあと60年ある。こういう話で、一体どうなっているのかなという気もします。

エネルギーがなくなったりするのは悪いことという見方もあるのですが、ある意味ではいいことだという見方もあると思うんですね。石油が少なくなって、石油がどんどん高くなると、今まで使われなかった自然エネルギーを使うということが出てくると思うんですね。石油の価格が安いと水力発電とか太陽エネルギーの利用というのがあまり進まないのですが、それが高くなるあるいは枯渇することによって、いい方向にも行くんじゃないかなというふうにも思います。それから、以前江戸時代の文化を、鎖国をして日本はもう本当に遅れたなと私は思っていたのですが、何でも藁だと。ロープも藁でつくる。雨合羽も布団も燃料も、何でも藁でつくる。祭りの道具も全部藁ですよ。藁しか頭行かなかったのかと馬鹿にしていたのですが、米と藁というのは全部自然で再生できるものですよ。そういう意味からいくと、極致だったんじゃないか。そういうことから考えるとよかったのではないかと。先生の話聞いて、そんなことを感じました。

それから、もう1点は、鳥羽市もほかの市町もそうだと思いますが、何かこれを基点にして全国的に有名になってお客さんも呼んでということは、必死になっていると思うんですね。ただ、その中でいろいろなことを考えるのですが、1つの小さなことでもいいから、特化するといいますか、1つに賭けるというのが非常に大事だなと思いました。上勝町も私行きましたが、葉っぱを頭に乘せてタヌキがひっくり返るとお金に変わるというふうなキャッチフレーズがあるのですが、鳥羽の旅館も上勝町でたくさん買っているんですね。で、あそこはすごく儲かっている。だけど、鳥羽や宮川村だといろいろやろうとしても、それはできなかったんです。

ただ、そういうことを考えると、ほかにもいろいろな例があるんですけど、いろいろなことに手を付けるというのは大事ですけど、そのうちの1つに特化して、それを徹底的にやるというのが、これから必要なんじゃないかというふうに、先生の話聞いて感じました。以上です。

(福井講師)

ありがとうございます。地域の個性を活かしていくということですね。志摩市長の竹内さん、よろしくお願いします。

(志摩市長)

福井先生、前々からいろいろお話も伺っているのですが、志摩市も合併した新しいまちだということで、それぞれのまちにいろいろな地域文化があるということです。人口も若干減少傾向にあるということですし、高齢化も進んでいます。地域の無い物ねだりはやめようということで、地域のいろいろな食文化もありますし、伝統的な文化もあるので、そういう地域のある物探しを一生懸命やっておるということです。地元学についても三重県自治会館組合と協働して、旧町単位の方で終わらして、これからだんだんまだやっていない地域もやっていきたいなということで取り組んでいます。

ある物探しの中でも、最近一番効果としてあるのが安乗ふぐの取組ということで、総理大臣表彰とかも貰っているのですが、持続可能な漁業であるとか、地域づくりまで来たのかなということを思っています。今までほとんど下関へ90%ぐらい輸出をしておったものを、地元の旅館の方が免許も取りながら、あるいは漁師の人が資源保護もしながら、非常にいい形になってきた。愛知県でとれる同じ天然とらふぐよりも3割ぐらい値段も上がってきた、高付加価値化してきたということですし、かつ商標登録を行ったということで、地域のブランドとして認定されておるということで、自然保護といいますか、700g以下のものはとらないという形で、それが結果的に量より質を追うことによって、それが高付加価値化になって、乱獲につながらないというような、持続可能な漁業の非常にいい形になってきたのかなと思っています。

県内のいろいろな市長や町長さんのお話を伺っても、「安乗ふぐ食べたよ」、「食べに行きたよ」というふうなお話も結構いただけまして、そんな形の地元にあるようなものをもう一回しっかり見直していきたいなということを思っています。同じような考え方、取組の中で、海女小屋であるとか、きんことか芋の取組というものも最近非常にいい形が出てきたということも思っています。

また、最近新しい例では、先ほど先生がバリ島のアマングリの例を言われたのですが、バリのウブドの方で新しい施設をつくらうとして、愛知県や三重県で活動されている口八

スを試行している女性の方々が、ぜひバリの取組と一緒に志摩でも同じような取組をやりたいたいというお話をいただいています。そういった地域文化の交流の中で、また新しいリゾート地、観光地のあり方というのも考えていきたいなと思っています。

(福井講師)

ありがとうございます。玉城町の辻村さん、お願いします。

(玉城町長)

よろしくお願いします。今までそれぞれの市町がやはり自分たちの地域の資源を活かして何とか盛り上げていこう、活性化していこうという流れがあったわけですが、なかなかそれが先生も分析されておられるように、2～3年は調子よかったけど、あと長続きしないと。いかに長続きするか、持続するかということにならないといけないわけですから、経済の話が出ておるわけですが、そういうようなところで、協働ということにならなければいけないということなんだろうと思います。改めてもう一度長続きできるようなポイントをご教示いただいたらありがたいなと思っています。そんなことでよろしくお願いします。

(福井講師)

長続きさせるポイント、本当に難しいですね。でも、やっぱり答えはあると思いますので、その話もあとでしたいと思います。度会町の大野さん、よろしくお願いします。

(度会町長)

いろいろ福井先生のお話を聞かせていただいて、この内容等につきましても、度会町におきましても、若干このような試みもしたところでございます。なかなか地域を引っ張っていくということは、本当に難しい問題を感じたわけでございます。

私も昭和の初めの生まれでございますので、大変昔の生活を思い出すと、今は本当に恵まれて非常に幸せな時期である。本当に苦労知らずの子どもたちが多いのではないかという感じがいたします。先ほど鳥羽市の市長さんが言われたように、本当に昔は藁1本でも始末をしながら、米1粒でも拾いながら、また野菜等々つくりながら生活をしていたわけでございます。本当にエネルギーの問題等につきましても、我々といたしましても、これから十分その問題は考えなければならないということでございます。大正、昭和の時代を考えますと、まったく山林、森林です。山を愛して、その山からの生活を中心とした農業を兼ねて生活をしていたわけでございますが、これをもう一度見直していかなければならないなと。この時代が来たのではなからうかなと。

エネルギー問題というのは大変なことです。これからの孫たちも相当この問題について真剣に取り組んでいただくのではなからうかと、このような感じもするわけでございます。福祉・教育は本当によくやっております。そして、環境も整備しております。これからはそういう問題につきましても、地域をいかにして取り込んでいくかということが大事じゃないかという考えもいたすわけでございますので、どうかひとつこの資料を見せていただきながら、もう一度我々の町としても、見直すべきものは見直し、そしてこれを参考にしながら、将来町の発展につなげていきたいという考えを持っているわけでございます。

(福井講師)

ありがとうございます。柏木さん、お願いします。

(大紀町長)

少し私はアングルを変えて申し上げます。今、集落が崩壊しつつあるんです。それはなぜかと言うと、減反政策にあると思います。間接、直接を問わず。この減反政策によって、今の共同作業というか、今盛んに言われている集団営農とか、地域づくりにはと、県もいろんな形のご案内をいただいているところですが、それを進めるだけの地域の根性というか、そういう集落根性がなくなってきているんですね。これはもともと教育にもよると思います。だから、集落が崩壊していることが、地域づくりに大きく影響していく。だから、私は「地域づくりとは何ぞや」と質問としたいと思っておるぐらいなんです。志摩市長さんも言われたように、地元学も一生懸命していただいて、改めて地域のよさを発見しよう。地域のいい所を隈なく見ていただきたいと思います。と思っています。

集落が崩壊していくということについて、子どもたちのためには、やはり地域興しをするのが、行政も支援をしてやっていくということですが、地域づくりにつきましても、それでは地域づくりの基本となるベースというか、ある程度生活基盤はもう行政レベルでしてきたんですね。どこの県の町村もレベルに達しておると思います。それをさらに地域づくりで、どんな事業で支えていくのかというのは、私も知事さんに伺いたいなと思っるところですが、地域づくりとは何ぞや。今の集落が崩壊する、連帯感が失ってきている。つまり、昔、40年代は、葬式出すと出合いでみなやったんです。墓掃除から寺の掃除から地域の草取り、溝掃除。みんな地域でやったんですね。これが50年代後半からみんな企業化してきて、この頃葬式でも出合いは必要ない。皆、葬式屋に出かけてやるでしょ。ここから地域が崩壊している大きな原因の1つになっているんですね。それから、世代が変わってきているので、言いたいことを言うわけですね。昔のように連帯感が全然なくなってきている。これは郷土をよくするという教育がおろそかになっている原因だと思います。そういう面の影響もかなりあるのではないかと。

それを手直ししようと思うと、これはなかなか大変なので、昨日もセンター長にも申し上げたのですが、住民自治の確立というのはどこから入っていくんだと。もっと県自体も全県下にわかるようにピーアールしてほしい。我々がそれで動いていくということにしなければ、住民自治なんて言ったって、県民は現実に問題がわかっていません。本当にそれは県自体でそれは自ら掛け合わなあかんやんかという強い姿勢で出てもらったら。我々も集落行って町政懇談会やるでしょ。「あんたらの問題やでやらなあかんやんか」と言っても、「それでも行政でやらなあかん」。こういうふうな意見の違いがある。それを解きほぐすのはなかなか難しいので、ですから県の言っていることの十分な答えを出すためには、我々を含めて認識を新たにさせてもらうということが、私は大事であると思っています。

紀勢高速道ができましたね、東紀州に。それで南三重活性化検討委員会というのが誕生したんです。尾鷲から奥伊勢ですね。今度、松阪も入れてずっとやるようにしています。それでは、何を取り組むんだと言っても、ほとんど答えが出ないわけです。観光的な物産を名古屋に発信しようやと。単調なことしかやっていないわけです、現実に。だから、地域興し、地域づくりとは何ぞやというふうな考えを今さら思うんですけど、これは先生言われる北海道など参考にしたり、参考にならないので。全然問題違いますよね、捉え方が。私どもには手近に企業もありますので、省みないんです。老化していくわけです。老化していく、酷使するものですから、老人ホームばかり流行るんです。そういう悪循環なので、そういうことも1ついろいろな問題を地域興しについては十分探究して取りかか

っていく必要があるのではないかと思いますので。まだたくさん言いたいことありますけど、この辺で。

(福井講師)

ありがとうございます。今のご意見は、稲葉さんにお話を伺ってからにします。

(南伊勢町長)

稲葉でございます。私のところは南伊勢町と言いますが、2町が合併して、三重県で一番貧乏な町同士が合併したわけです。そして、高齢化率も三重県一なんです。40年代には随分栄えた町でございます。その要因として、私は石油社会になったということが大きなことだと思っています。先ほども言ったように、鳥羽の市長さんの話にもあったように、石油が早く枯渇していかないかなというぐらいの思いでいます。本当にべらぼうに安いですね、ほかの物価と比べて。今、上がったといえども、ほかの物価と比べれば、もう比べものにならないぐらい石油は安い。やはりそれによって、日本の経済の底上げがあったと思いますが、その歪みを受けたのが一次産業を主体とした町ですが、過疎化率を見ますと、一次産業にいかに依存していたのかと連動しています。これは間違いないです。

そういうことで、本当に一次産業を産業としていた町が衰退をしている。私のところの町は、海岸線が240kmあります。三重県の1/4が私のところの町でございます。そして、面積もくしくも240km²。何と云っても景観も素晴らしいところでございますので、これを活かしたまちづくりをしないとイケないと言って、みんな企画課長を中心に頑張っておりますが、何事についても基本的に間違っているかどうか知りませんが、持続性がなかなか難しいというのが現状でございます。また、福井先生にいろいろなことを聞きに、私もまちづくりに対して企画課長と一緒に聞かせていただきたいなというような思いでございます。

今まで林業に関わる部分も随分あったわけですが、もうこの50年間ぐらい雑木が多いのですが、切ったことないもので、鹿や猿がどんどん出てきまして耕地を荒らすと。それをとってブランド商品にできないかということで、猿1匹とってきたら幾らやということを増殖しまして、それをソーセージにして売ったらヘルシーと言われている時代ですので。鹿も結構美味いんです。私もいただいたのですが、そんなことも考えながら、そして漁獲高も三重県一なんです。漁価が安くなってきてなかなか大漁してきてまともな生活はできないという状況の中で、苦しく喘いでいるところでございます。最近、インドや中国も魚を食べる、魚の消費量が多いということで、去年の巾着網の漁獲高は、通年と変わらないのですが、値が20億ぐらいの水揚げをしていくのが、40億して何としようと言って困っているような現状もあるのですが、本当にそのようなことで、やっぱり石油が枯渇が早まって、一次産業が見直される時代になってほしいなという思いであります。

そういうことで、話になったかどうか知りませんが、そんな思いでありますので、またまちづくりに対しては福井先生にいろいろと知恵を貸していただいて、そして一生懸命頑張っていきたいと思っております。よろしく申し上げます。

(福井講師)

ありがとうございます。先ほど柏木さんの方から言われた地域づくりですね。そもそも地域づくりというのはどういうことを言うのかということ、ちょっと知事の方に一度聞かせていただきたいと思っております。

(知事)

これは先生の方から。

(福井講師)

先ほどお見せしたスライドの中でお話をしなかったのですが、北海道の登別の例が非常に面白いなと思っている1つの大きなポイントは、みんなが関われる仕組みをつくったんです。教育というのが非常にわかりやすかったんですね。彼らが今一番新しくやっているのが、森の幼稚園という事業を始めています。要は、幼稚園生を森に入れよう。これ結構危険を伴うんですね。そうすると、地域のおじいちゃんとかおばあちゃんとか、いろんな知恵を持っている方々がそこに関わらざるを得ないんです。お手伝いしていただかないと。はっきり言うと、本当にたくさんの方が幼児を見守りながら教育活動をしているんですね。

ですから、どうやったら地域固有の課題、それをみんなで共有して、それをみんなと一緒に解決していく仕組み。そういうものが複層的にいろいろできると、地域というのが元気になるんじゃないか。結果論的な話ですが、私はそういうふうに最近感じていました。ですから、先ほど農村食堂のような小さな話をしましたが、意外とこういうものが地域の元気の核になっていくんじゃないかな。実は、イタリアのちるころというのは、第二次世界大戦の頃に、それはレジスタンスの拠点になっているんですね。要は、地域を何とかしてよくしていきたい。その中ですごく悲惨な戦争の中で何とかしようというのを、地域の人たちがカフェとかバーとか、そういう所で話し合いながら、水面下で社会をよくしていく。そして、レクリエーションという言い方があるのですが、実はそれはリ・クリエーションで、地域を再創造するという意味らしいですね。そういうことをそういうお茶飲みながら、酒飲みながら彼らは考えた。何かそういうところに私はヒントがあるんじゃないかなというふうに思っています。知事、いかがですか。

(知事)

先生のお話は、非常によくわかるお話だと思います。それで、私ちょっと別の角度から言うと、一番最初に伊勢市長さんが言った中で、これから地域内分権、自治の仕組み。これがどう取り組んでいくかというお話でございます。柏木さんのおっしゃったのと非常にそこ共通していると思うんです。

そこをどういうふうに持っていくかということについては、残念ながら今まで地域でのそういった思いを実現できるような国、あるいは社会全体の仕組みになってなかったし、何でもかんでも東京から、お江戸から配られてくるメニューを探し出してやってくるというような、そういう時代が長いこと続きました。そういう意味で、もう一度我々全体意識改革をしていかなければいけない時だと思います。

今日、先生のお話で一番最初に言ったように、もう成長ということ、そういう側面からものを考えていく時代ではないですねというお話がありましたが、そういう意味で、我々地域において、これから取り組んでいく中で、住民と一緒にそういう意識の持ち方というものを変えていく必要があると思います。それで一番きついのは、私は本音でトークのときなんかには言っておるように、県民の人、今まで行政にものを言ってきた形で甘えてくださるなど、自分でできることはまずやってください。いわゆる個の確立。今日、先生も個の確立、補完性の原理。多分、これから地域社会の中で一番大事なものはそこだと思

います。そこへやっぱりきちっと意識を持っていくということ。これは行政仕組みづくりの原点として考えておかなければいけないのではないかと。こういうふうには思います。

ただ、その上でどうやってくんだということについては、まさに難しい、一番我々が悩む問題だと思います。地区によっても違うし、人によってもいろいろな考え方がありますから、それぞれ地域の特色を活かして、先生おっしゃるように、それをみんなで関わっていくような仕組みという形に何かで仕上げていければ一番いいんじゃないかという気はします。

(福井講師)

ありがとうございます。柏木さん、どうぞ。

(大紀町長)

私のところも、ボランティア活動の盛んなところなんです。NPOもあります。かなりそういう活動は活発です。また、県下で森林組合が一番儲けているのは大紀町の森林組合です。収益を上げている。去年は1,300万円、今年は1,600万円上げているんですね。これはやり方を変えたり、得意先回りして、結構そんなことして儲けておるんですね。小径木を抜き切りするのに大きな機械を買って、その機械でみんな倒して、それをそのまま売るものですから、結構儲けているんです。ですから、そういう点のやり方も議論しておるわけがあります。

もう一つ、よく知事が言われる協働、参画、住民主導というのは、確かにこれから地方分権になってくると、そのことは切実に感じておるんですね。ところが、住民は意識改革がまだできていないもので、その辺をもっと県サイドでアピールしてもらわないといけない。「そういう時代ですよ」ということを言ってもらわないといけないのではないかと。私のところだけで言っても所詮「そんなもの行政でやらなあかんやないか」というふうな言葉にすぐに直結してくるもので、なかなか財政も伴わないわけですから、そういう面の論理も展開していく。私は住民の声を吸うのは、やっぱり自治会で、予算の編成に当たっては、それぞれの地域の自治会で議論して、それから持ってこいと。それを予算の範囲内でやると。林道、農道など、学校に関わること等についても、地域で持ってくる。私は懇談会といっても所詮突っ張り合いするだけのことで、ものにならないので、集落で予算要望してくれと。その代わり、ただ単に区長だけの意見ではいけない。全体で、いわゆる地方参加という考えのもとで、そんなこととしてやっております。

さっきちょっとどなたか言いましたが、農業は深刻。獣害対策。これは完全に減反が起こしたんです。森林政策の一つですから。とにかく鹿、猿、猪が来るわけです。これを獣害対策で電柵を張って。私のところは20kmぐらい張っています。本当に猪と人間の知恵比べです。ちょっと柵を広い目にとりますやろ。広い目にとると、広いところに猪は突っ込んでくる。ちょっと杭の弱い所へ来て、ぶち当たってきて倒しますからね。農業をもう放っておこうと、わずかの山田ですので、そういうことをしていた。それから、私は絶えず農協にも言うのですが、私のところの米所なんか、ほとんど大阪の業者とつながっているんです。前金でくれるものですから、農協へ全然納めない。みんな大阪へ持っていきます。

それだったら、よく言われる農業改革、集落営農。集落で企業営農というのか、集落営農で農地を保全していかなかったら、これはとてもじゃないけどその農家の崩壊につなが

ってしまいます。そういう点の施策等についても、もっと強引に県は進めてもらったらどうだろう。それには奨励金を出すとか、そんなようなやり方で集落営農にもっと力を入れてもらわなければ、農業改革ちっとも言ってないやないか。農林水産支援全然入っていないやないか。広い所で集落営農やっている。肝腎な農山村にそういう制度を入れてもらわないといけないという話もしておいたんです。ですから、指摘するんじゃないし、手法としてそんなことを考えていただいたらどうかなと思います。

(福井講師)

そうですね。今年も実は三重県さんの隣の和歌山県さんで、2年前から年間10地区、各3回地方の方々のワークショップを主催させてもらって、課題解決のお手伝いをしています。合計二十何箇所やったのですが、どこの地域行っても、今まさに柏木さんおっしゃるように、「そんな税金払っているんだから、行政がやるべきものだ」と必ず言われる。

もう1つポイントが、自治会でとおっしゃいましたけど、例えば1つの集落で50人、60人集まってくれただくと、これだけいわゆる地域の有力者以外の方々、女性とかそういう方々が一緒に集まってきたのは初めてだっていうんですよ。で、地域のことをみんなで話し合う機会というのがまったくなかったと、こういう話が出るんですね。ですから、地域の合意をどう取るか。まさに集落自治なんですけど、それをどうするかというのは非常に難しいんですよ。ですから、それをまずやらせてもらおう。危機を共有してもらいながらやらせてもらう場をつくる必要があると思うんですね。これはぜひ県の方で、そういう場を推進する仕組みをつくっていただくと、私はよろしいんじゃないかと思いますよ。

同時に、今獣害の話が出ましたが、和歌山県は実は三重県よりひどいです。古座川の上流なんかへ行ったら、この前も区長さんと話をしたら、「福井さん、去年やってももらったけど、俺もうだめだわ」と言うんですよ。「どうしたんですか。」「もう獣害があまりにもひどくて、もうみんな出ていきたいと言う。もう農業できない。」と言うわけです。昼間から家の中に猿が来て、冷蔵庫の中を食べると言うんですよ。猿、鹿、猪、あとほかにもいろいろいるんですって。こうなると、人間と動物の知恵比べではなくて、檻の中に入っている人間みたいなものだと言うんですね。こうなるともうどうしようもない。「だけど」と言うんですね。生きていかなければいけないわけだ。何とかする。

それは結局、そういう場をみんなでつくれたから、みんなで少なくともまだ30代、40代の間もいますから。嬉しかったんですけど、40代の方が「和歌山の都市に出ていこうと思ったけど、みんなで話し合ったら何とかなるかもしれないと思って、あと数年ここでやっていくことを決心した」とおっしゃってくださいました。そういう場をつくって、それぞれ地域の課題というのはそれぞれ違いますから、いろいろ解決する手立てをみんなで考えていくというのは、1つの地域づくりのあり方かなと私は思います。いかがでしょう。ほかの皆さんも。

(南伊勢町長)

獣害対策ですが、基本的に電柵の予算をしてやっていますが。基本的に数を減らしたらいいじゃないかということで、昔ヤチンと言っておりましたが、それも上げて。猟友会の方もみんな高齢化してきまして、趣味と兼ねてするんですけど、やっぱりある程度趣味でしているばかりでは生活も成り立たないので、そこへアップしてしたらどうだ。絶対数を減らしたらいいやないかということです。猟友会も高齢化してきて、猟友会に入ってくる

人も少なくなっています。本当に猿と知恵比べ。何か外して入ってくるみたいです。それで、冷蔵庫やらご飯を食べたりしているというのが現実にあるということです。本当に大変なんですよ。

先ほどの石油がない時分は随分と燃料にしていたというお話ですが、私も28ぐらいまで10年間ぐらい機帆船で名古屋を中心に三河などに。南島でしたので、12,000町歩ぐらい山がありました。12年間ぐらいで山を切ると再生するんですね。ですから、1,000町歩の山を伐って、それを燃料に。そこに雇用も生まれたし、地域の財源にもなって、人口も今の倍ぐらいいたわけです。その林業に携わる集落はもう激減して。農営企業なんですね。やっぱり早く枯渇をして。本当に山の資源を燃料に何とか使えるようなあれにならないのかなというふうな思いでございます。また教えてください。

(福井講師)

稲葉さん、私もそのとおりだと思っています。実は1つヒントですが、獣害というのもそういう仕組みの中で生まれているわけですから。山に手が入らない、草地がない。そういうところから生まれているわけです。実は、徳島県が今新しいことをやろうとしています。これは何をしようとしているか。昨年、NEDOの協力を得て調査が終わって、本年度から本気でやろうとしています。吉野川流域で間伐材をうまく活かせるようなシステムをつくる。具体的には、下流域、上流域にハウス栽培が膨大にあるものですから、ハウスの燃料に木材を使う。流域バイオマスでそれをやる。これは県の仕事であると、流域でやっています。

例えば、先ほど申し上げた上勝町も含めて、皆さんがそれを協力して、町がいろいろ協力しながら、県が全部まとめて、必要な資金を国からも取ってくる。県がそれをまとめてやる。そういうことによって、全体の山も美しくなるし、獣害も減るし、それから農業のエネルギーも脱石油を少しずつ推進していく。こういうことをやろうとされています。私、そういうようなことが、三重県版で同じことをやれとは言いませんが、何かそんなような仕組みができれば、非常にいいんじゃないかと思っています。

(南伊勢町長)

先生、そのぐらいの量を利用するぐらいではいけないので、燃料に使うということだと思います。それがべらぼうに安い石油があるものですから、コストの面でどうしても。当たり前のことです、こんな現状になるのは。もうこれが枯渇していけば、本当にそれに頼らなければいけないという時代になれば、また山もしっかりと再建されると思います。もうべらぼうに安い。石油が3倍か4倍になってくれると、だいぶまた変わってくる。

(福井講師)

はい、知事。

(知事)

話が関係ないみたいで関係がある。玉城町長さんから継続するということが非常に大事だと。しかし、なかなか継続って難しいねという話でした。1つのいい取組だと思って、なかなかそれが継続できないということでは、やっぱり成果は一時しか出ないわけですね。そういう意味では、非常に大事なところなんですけど、そのためにはまずやっている人がそのことに参加をすることによって、より好きになる。「あっ、いいことだな」と自分が実際に参加してみてもいいことだな、自分も楽しいな。そして、自分の価値観からいっ

ても、外から見ていたのとは違ってこんなのだと思うのが、継続していく意思につながると思います。

そういう意味では、先生の今日のお話でも大事なことは、旧来地域でも男社会というのだったでしょ。自治会なんて完全に男社会。ところが、男の発想でやっているものは、あまり続かないで、今全部おかみさんの会が元気にしていて、三重県では鳥羽でもおかみさんの会があって、志摩はできてないかな。伊勢では二見やいろいろな所で。しかも、三重県内いろんなところでしているでしょ。おかみさんの会が何で男と違って、女の人は何で違うのかなと。男は何で情けないのかなということ。私はそこは非常に大事だと思います。大紀町でも柏木さんのところ、むしろボランティアも女の人が積極的に動いています。なのに、自治会長がどうのこうのとか、男社会でやっけていても、それは続かないと思います。

そこで大事なことは何だといったら、やっぱり感性の社会になってきている。その感性というのは、三重県でもしているけど、理屈の世界、正しいからやりなさいというような世界とは違うんですね。好きだからやるという世界なんです。好きか嫌いか。したがって、いろいろ考えてみたときに、僕は獣害も猿が山から下りてきて、家へ入って冷蔵庫空けて食べた。そうしたら、山で食っているより旨い。こんな旨いものみんな食っているのか。山へまた戻っていくと、仲間に「こんな所で食っている実よりも、冷蔵庫の中のやつの方がずっと旨いぞ」と教えるわけやな。だから、猿の感性からいったら、人里の方が旨いんやなと。人がどうのこうの言っただって、脅すような格好をしながらキャーと言ったら、向こうは逃げるのだから、大丈夫、大丈夫という感じで、猿の感性から言ったら、猿に山の方がいいなと。山の方が楽しいな、安全やな。そういう感性を持たせるようにということを考えないと、個体調整ということについては、三重県ももちろんテーマ広げてやっていますが、地域も広げて。しかし、やっぱりこれは自然保護とか、例えばニホンカモシカだったら県獣となっていますから、したがっているんな観点で、これは県民全体の支持が得られ難いんですね。だけど、猪や猿がとにかく人里よりも山奥の方がいいと思わせる何か方策。要するに、感性ですよ。そういうのもちょっと考えてみるというのはあると思いますね。

(南伊勢町長)

先生、猪が山の方がいいっていう感性は、山におれんので出てくるんだろうね。

(知事)

そうなんです。だから、今は山の環境が悪過ぎる。

(大紀町長)

北海道へ行って獣害のことを6カ町村で言ってきた。その中で、とにかく猿の城を山につくったらどうか。そこで猿が集結すると思う。猪は猪でそこに集結する。そういう場をつくったらどうかという話も聞いてきました。それは1つの方法だと思います。

(知事)

それで、季節ごとに実がなる木を山に猿のために植えてやる。それは人が食べるやつじゃなくて、雑木化していて、いわゆる植林ではなくて、山も強くなると。広葉樹で、その時期に実になるようなものをいっぱい植えてやると。もっとも全国からそこへ集まってきたら、また困るが。それをみんながやれば、本当はね。

とにかく言いたかったのは、感性ということが必要です。我々人間だって、やっぱり感性で動くということなんです。したがって、これまでの理屈で「お前こやないか」という説得ではなくて、一回やってみよう。やってみたら、「ああ、おもしろいな。それならやるか」という、そういう引っ張り方をしないと、僕は継続性だとかそういうのも続かないということになると思います。

(福井講師)

そろそろあと時間がなくなってきたので、ご発言をされてない方、もしよろしければ。

(伊勢市長)

先生もそうやって地域の再生とか地域づくりと言うときに、必ずそこに人がいるということが大前提になっていると思います。今、いろんな地域の例がありましたけど、頑張っているというか、その地域の中で地域づくりしなければならない。まず、それには入口として、住み続けるとか住むんだという覚悟がある。そういう人たちがいないことには、地域づくりはまったく意味をなさないし、お話があったように集落崩壊が起こっている。その中でどうやって住み続けられる感性とといいますか、心意気を持った、根性を持った、そういう人たちをどうやってその地域で育てもらうか。そのことが入口になって、地域づくりにいかない。本当にそこが好きで。山を愛した頃の心って好きな言葉で引用させてもらうんですけど、そういったそこに住みたい、住み続けたいという人たちがいない限り、地域づくりのエネルギーになってこないと思います。ですから、入口でどうやったらそういった誇りを持って、感性を持ってそこに住み続けたいという人がたくさん育つような地域ができるかなと。そのことがまず基本になればならないと思います。公は何をするかといったら、そういった皆さんが誇りを持ってもらったり、そこに住むことの価値をきちんと見えるような、そういう応援といいますか、仕組みづくりがまず入口にあって、スタートができるのではないかと考えています。

ですから、その辺の我々の根っここのところです。放棄なんかしないんだ。そこへどうしても住み続けたいんだ。生きる場所をまず決めて、それで仕事を探そうじゃないかという、そういうところへつながっていくような形の生き方、感性を大事にできるような、そんな人づくりをやっぱり目指さなければいけないと思っていますので、まず地域づくり以前に自分たちが住む所に心を寄せるような、そういう人たちを養成するとか、たくさん湧いてきてほしいなという感じがします。まず入口ではないかなと思っていて、ぜひ我々が今やらなければいけないのは、どちらかというところかなと。そうしたら、当然生き方とといいますか、生きる術、糧も含めてそれぞれ考える。その入口には、まずやっぱりそこに住み続けるという覚悟。皆さんがあれだけのことをやっつけていらっしやるだけかなということを感じていますので、その辺の施策が行政としても大事なかなと思っています。

(福井講師)

ありがとうございます。そろそろ時間ですが、今のお話で、私どもの大学の千賀裕太郎先生の研究室で、子どもの時代にその地域で外で遊んだ、あるいは外で遊ばない子どもを比較した。大人になってから、地域に対しての愛情だとか関わりを持つ率は、圧倒的に差があるということがわかりました。ですから、小さい頃にいかにその地域で、外で、遊ぶか。それが非常に重要なポイントであるということが明らかになっております。ぜひその

辺もご参考にしていただければと思います。

それでは、私の時間は以上で終わらせていただいて、辰己さんの方にお渡しします。

(司会)

どうも先生ありがとうございました。皆様方からもまだまだ意見をいただきたいところでございますが、予定時刻が迫っておりますので、このあたりで意見交換を終わらせていただきたいと思います。

最後に、知事の方から本日のブロック会議の御礼を申し上げたいと思います。

(知事)

どうも皆さん、ありがとうございました。実にさまざま悩みをあるいは課題を抱えておるといふその実態が短い間でも吹き出してきたような、そんな感じがいたします。それだけにまた行政としてどう取組いただくのか、それは市町のお立場、それからまた私も県として「県土づくり」にそれを活かしながら、あるいは「地域づくり」に対するご支援もしっかりやらせていただく必要があるなと思っています。

したがって、そういう意味では、今日いろいろ意見交換をした中で、出てきた課題とか方向をもう少し掘り下げてやっていただく中で、最終的にいろいろな個別の課題にまでこの「地域づくり」の話し合いを進めていくことができれば、実は今日の会の一番の目的が達することができるということでもあります。

センター長から言いましたように、市町の企画担当の部長さん、課長さん等と県も一緒になった推進会議であるとか、あるいは課題別の会議であるとか、こういったことも順次深めていきながら、ぜひ有効なパートナーとしての連携、取組をさせていただかなければならないと思っています。

最後に、ちょうど伊勢市長さんが最後にもお触れになりましたけど、我々はその地域が好きかどうか、生まれてくるときには何も生まれる親を選択しているわけではないし、地域を選択しているわけではありません。だけど、親から注がれた愛情だとか、温かさ、ぬくもり。こういうものがあってこそ、そこにおれるんですね。そういうものがない親に対しては、子どもは反発していくであります。地域に対しても同じなんですね。したがって、生まれたそこで好きだと思わせる、ここにいたいと思わせるものがなければ、やっぱり人は長くそこにいてくれるはずもありません。

いろんな価値観、いろんな誘惑、あるいはいろんな衝動というものを駆り立てるような激しい世の中の移り変わりの中です。それから、学問等を求めて東京だとかいろんな所へ行かなければいけないということもあるでしょう。しかし、それを乗り越えてふるさとが好きだという思いをどうやって育てていくのか。それがまずないといけないわけですね。より地域に愛着を持つ、より好きになる。やっぱり自分の生まれた所、あるいは三重に新たに住みたいという気持ちをみんな育てる。そういうものをしっかりと追求しながら共有できたら最高だと思います。

今日は、そういった意味でこれからいよいよ地域づくり支援会議が難しい問題、課題の中で成果を出せるように心から期待をし、皆さんにもお願いを申し上げます。そして、福井先生には今日本当にありがとうございました。お世話になりました。

(司会)

どうもありがとうございました。それでは、これをもちまして「平成 19 年度 県と市町

の地域づくり支援会議 第1回ブロック会議」を終了いたします。皆様、どうもありがとうございました。